

英語科

1 研究について

(1) 令和2年度の研究について

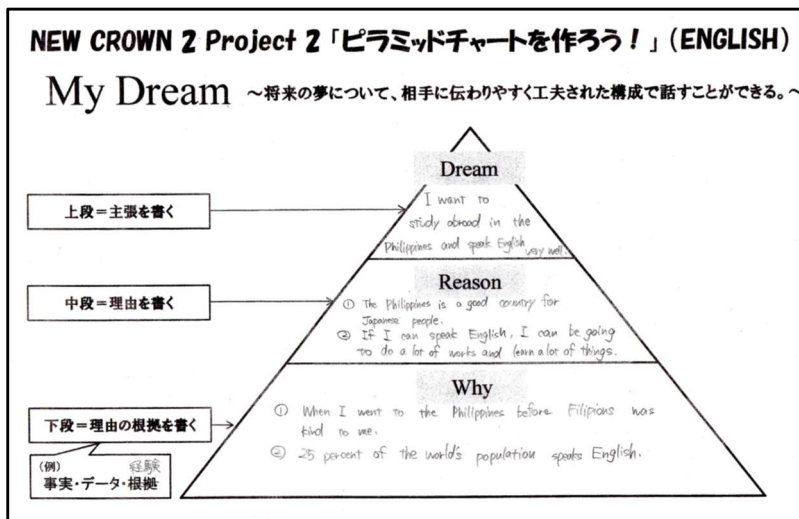
令和2年度の教科研究主題

「自己理解・自己管理能力の向上を図る言語活動の工夫～思考ツールを活用した活動を通して～」

言語活動において、生徒が自分自身のことについて主体的に考え、それを自分の言葉でわかりやすく表現することがコミュニケーションを図るための第一歩である。したがって、本校の英語科では、キャリア教育における基礎的・汎用的能力の1つである「自己理解・自己管理能力」を向上させることが、英語を学ぶ上で必要な力だと考えた。生徒が思考ツールを活用し、英語の学習を通して自分のことについて考え、相手に伝わるように表現する力を育てるために本主題を設定し、以下の実践を行った。

①思考ツール「ピラミッドチャート」の活用 [資料1]

自分自身の将来像や将来の夢について考えを深め、それを発表するために思考ツール「ピラミッドチャート」を活用した。これにより生徒は、自分の意見や考えの理由・根拠について探究し、スピーチの内容を論理的にわかりやすくまとめることができると思った。



[資料1] ピラミッドチャート

②「スピーチを評価するためのルーブリック (評価基準)」の活用 [資料2]

互いのスピーチを相互評価し合うことで、聞き手によりわかりやすく工夫された構成を心がけるよう指導した。発表の際の発音や流暢さに関する項目や内容に関する項目など、それぞれについてルーブリックを活用してアドバイスをし合うことで、自らの目標が明確になると同時に「今自分がどの項目をどのくらいできているのか」ということが可視化され、学習の振り返りにつなげることができると考えた。

| スピーチを評価するためのルーブリック (評価規準) | | | | | |
|---|---------------------|-------------------------|--|--|--------------------------------|
| 発表者 (話し手): NAME () | | 評価者 (聞き手): NAME () | | | |
| 内容 | 発表 | | 内容 | 態度 | |
| 評価 (点数) | 発音 (正確さ) | 流暢さ | 文のつながり・語の一貫性 | 聞き手の理解度 | 話を続ける工夫 |
| A (3点) | *発音評価項目を2つ満たしている。 | *沈黙や言い直しがなく、スムーズに話している。 | *「導入・本論・まとめ」の流れで、聞き手に伝わりやすい構成になっている。 | *わかりやすい英文で、すべての内容が理解できる。 | *聞き手の目を見て話している。(メモや原稿などを見ていない) |
| B (2点) | *発音評価項目を1つ満たしている。 | *沈黙や言い直しはあるが、最後まで話している。 | *「導入・本論・まとめ」の流れになっているが、つなぎことばがなく内容が伝わりにくい。 | *だいたいわかりやすい英文で、ほとんどの内容が理解できる。 | *聞き手の目を見ながら話している。 |
| C (1点) | *発音評価項目を1つも満たしていない。 | *沈黙や言い直しが多く、最後まで話していない。 | *箇条書きでつなぎことばもなく、内容が伝わらない。 | *難しい単語や文法が多く含まれたわかりにくい英文で、内容がまったく理解できない。 | *メモや原稿を読んでいる目線が合わない。 |
| *発音評価項目 ①音量:相手に伝わるような音量で話している。 ②発音:それぞれの単語の発音やアクセントが正しい。 | | | <発表者へのアドバイス・感想> | | <評価・点数> |
| | | | | | / 15 |

[資料2] スピーチを評価するためのルーブリック

(2) 令和3年度の研究について

令和3年度の教科研究主題

「課題対応能力の向上を図る言語活動の工夫～思考ツールを活用した活動を通して～」

課題対応能力とは、仕事をする上で様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。急激に進むグローバル化、情報化社会においては、情報を正しく理解、選択し、主体的に課題を発見する力、またその課題を解決するために計画を立て、実行する力が求められている。令和2年度同様、思考ツールを活用することによって、生徒自身が課題を見つけ、どのようにその課題に取り組むかを考える力を養いたいと考えた。そこで今年度は以下の実践を行った。

①ルーブリックを活用した課題対応能力を育てるライティング活動

今年度より一人一台のタブレットを活用した授業を行うことになった。2年生ではスライドを活用し、不定詞を使ったクイズづくりをグループで行った。ルーブリックを提示した上でクイズづくりを行うことで、生徒に課題に対する見通しを持たせた（[資料3]参照）。また、グループで作ったクイズを他グループにブラッシュアップさせた。ルーブリックをもとにアドバイスをさせることで、生徒たち自身にどのように工夫すれば聞いている人に伝わりやすいクイズになるかを考えさせた（[資料4]を参照）。

| Rubric for this task | 2つのものや、3つ以上のものを比較する表現（比較級・最上級・as-as...）を使った表現 | ガかりやすさ | 構成 |
|----------------------|---|--|--|
| A | 比較する表現を正しく使うことができている。 | クイズの回答者に配慮し、1つ1つの文が分かりやすく書かれている。かつ5つの文を通して答えに到達することができる。 | 5つのヒントすべてについて、徐々に答えに近づくように出題の順番が工夫されている。 |
| B | 比較する表現を使っているが、表現の一部にコミュニケーションに支障がない程度の誤りが見られる。 | クイズの回答者に配慮し、1つ1つの文が分かりやすく書かれている。 | 一部のヒントについて、出題の順番に工夫が見られる。 |
| C | 比較する表現を使っているが、大きな誤りが見られ、文の意味が通じにくい。または、指定された文法が使われていない。 | （難しい表現や単語が使われているなど）内容がわかりにくい。 | ヒントの順番について、工夫が見られない。 |

[資料3] クイズ作成におけるルーブリック



[資料4] 生徒の作成したスライド



②ノートを活用した課題対応能力を育てる取組

課題対応能力の育成を目指し、ノートに「課題」と「To do」を書かせる活動を継続して行った。課題には、単元の新出文法や学習した表現を振り返り、自分で学習課題（できるようになりたいこと）を設定した。ここでは難しい課題を設定するのではなく、生徒が、個別に最適な課題を設定し取り組むことを目指し指導した。そのために、練習問題を解く過程で、その単元で何ができるようになり、何が課題なのかを自ら見つけ、整理していくよう声掛けをした。それに対し「To do」には、「課題」を達成するために具体的に何をすべきかを考え、まとめさせた。自分の課題を発見することが難しく、課題をまとめられない生徒も見受けられたが、そのような場合には模範となるノート例を見せたり、「課題」の例を提示したりするなど、課題を発見するための考え方がわかるようにした。

2 2年間を通しての成果と課題

(1) 成果

令和2年度に行ったピラミッドチャートにおいて、自分の将来の夢について考える上で思考ツールがととても効果的であった。ピラミッドチャートを作成することで、意見や考えを羅列するのではなく、論理的に工夫して文章を構成し、スピーチを行うことができた。その後、ループリックを活用し、生徒同士で評価を行った。授業後の生徒が記入した振り返りシートには、「ペアで互いの発表を評価し合うことで、さらに自分のことについて理解を深め、相手にわかりやすい発表の仕方を学ぶことができた」や「自分をもっと相手に知ってほしい、わかってほしいと思うようになった」という回答があり、自己理解・自己管理能力の向上につながった。また、研究授業後に行った意識調査では、「英語で自分の興味や関心、将来の夢などについて考え、それらについて意欲的に対話や発表をしている」という項目に対し、肯定的な回答が約67%から約76%に増加した。こうした「自己理解・自己管理能力」の向上が生徒の学習意欲を引き出す要因になったと考える。

令和3年度は、[資料3]のループリックを活用したことで、「表現の幅が広がり、これまで以上に質の高い豊かな表現力を育むことができた」という感想を持つ生徒が多かった。

ノートを活用した課題対応能力を育てる取組では、生徒によって設定した課題のレベルは様々であり、「覚えていない単語を完璧に覚えたい」や「表現の幅を広げるために教科書本文のテーマを自分の言葉で要約する」という課題を設定した生徒がいた。「To do」では、ワークの問題を解き直し文法事項を完璧にすることや、既習表現との違いをまとめるなど、課題達成の手立てに各生徒の工夫が見られた。

実践後に行った実態調査では、「授業やテストの振り返りを通して、自らの課題を設定し、その課題をクリアするために取り組むべきことを自分で考え、実践している。」という項目に対し、肯定的な回答が1年生で1.3%増加し、3年生でも1.7%増加した。この増加の主な要因として、今年度より全学年共通で実施した課題対応能力育成のためのノートの活用の成果であると考えられる。また、「何かわからないことやできないことがあったときに、自分から進んで調べたり、質問したりして解決しようとしている。」という項目に対し、肯定的な回答が2年生で3.3%増加した。この増加の主な要因として、今年度2年生で実践したプレゼンテーションスライドの協働作成の中で培われた成果だと考えられる。さらに、「より良い表現になるように間違えたところを直したり、思考ツールやループリックを使って改善したりしようとしている。」という項目に対し、肯定的な回答が3年生で3.6%増加した。昨年度から思考ツールとループリックの活用が習慣化し、課題に対する対応のためのツールとして日々活用され続けてきた成果であると考えられる。

(2) 課題

2年間の研究を通じて、生徒たちが自ら課題を見つけ、それに取り組み、解決することによって単語や文法といった基礎的な学習からレベルアップしていく力がついた。その身に付けた単語や文法の知識を活用し、ある程度まとまりのある文章を場面に応じて書く力についてさらに向上させていきたいと考える。実態調査の「与えられた課題について、適切に英語で書くことができる。」という項目に対する肯定的な回答が、この2年間を通じて全学年7～8割に留まっていることから、場面に応じて適切に単語や文法を選択し、正しくある程度まとまりのある英文を書くことに難しさを感じている生徒が一定数いることがわかった。

そこで、来年度は、書く活動を通して、学習していることが将来にどのようにつながっていくかを考え

させることで、キャリアプランニング能力の向上を図りたい。そのために、研究主題を「キャリアプランニング能力の向上を図る言語活動の工夫～ライティング活動を通して～」として、さらに研究を進めていきたい。